

## もうひとつの人類史

——歴史の詩的転回——

③

### 6. 人間の消滅

#### 6-1. 理性と狂気 (あるいは、人間と人間以外の者たち)

【理性——見た目と中身のズレの調停者】

自分が何者かを教えてくれる神も、王も、将軍もない。近代とは、人間自身がおのれを定義する時代。革命によって剥き出しになった《人間》。どこまで人間はおのれの《理性》に頼ることができるだろうか？

【排除すべき非理性 (=非人間)】

魔女や狂人。表象と実在のずれをもたらす非人間たちにもたらされる過酷なあつかい (ナチスの行なった「劣等民族 Sub-human」に対する迫害。劣等民族は、ネーションの同一性をゆるがせにする……)。

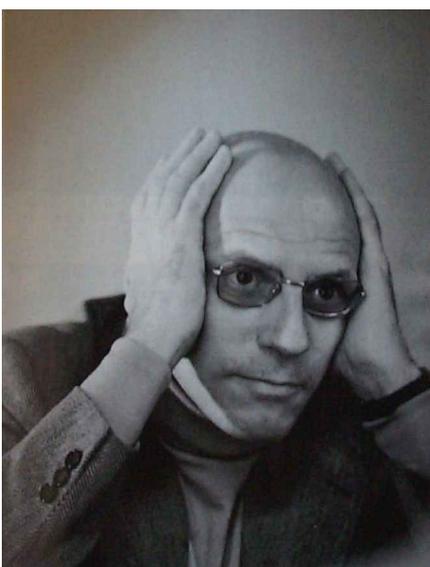
→ 理性により、魔女や狂人は、空想の世界の住人に。空想をはぎ取られた残りの現実には、犯罪者や病人として、監獄や病院へとその場を移していった。理性はより健全になった！

★ 歴史とは、神から王へ、そして人間へとつづく、理性的主体の形成史だった……。

But: こうしたヒューマニズム (人間中心主義) が、「人間=ピープル=ネーション」の定義を外れるものを排除する傾向を生んではいないか。理性主義と人間主義のあいだの悪循環……。

→ 人間の歴史は、それ自体、善であるか否か。同じ種同士で戦争し、支配しあう理性的猿としての、人間。

#### 6-2. ミシェル・フーコー



#### Michel Foucault (1926-1984)

ジャック・デリダやジル・ドゥルーズとならび、20世紀後半を代表する哲学者・歴史家。コレージュ・ド・フランスの教授。後天性免疫不全症候群にて死去。

【主著】

『狂気の歴史』(1961)、『臨床医学の誕生』(1963)

『レーモン・ルーセル』(1963)、『言葉と物』(1966)

『知の考古学』(1969)、『監獄の誕生』(1975)

『知への意志 性の歴史Ⅰ』(1976)

「汚名に塗れた人びとの生活」(1977)

『快楽の活用 性の歴史Ⅱ』(1984)

『自己への配慮 性の歴史Ⅲ』(1984)

○ フーコーのオリジナリティ

理性的主体の形成史ではなく、狂気の側から、歴史を見つめてみよう！

Cf. ジュール・ミシュレの歴史書『魔女』を受け継ぐ哲学的探究

古い歴史……王や貴族、武士たちのもの。

近代の歴史……人間の歴史へ。固有名をもった偉大な英雄ではなく、名もなき民衆の歴史が中心（ミシュレ）。魔女や狂人は空想的な外皮を剥がしたうえで、監獄や病院へ。そこで理性の再教育がおこなわれる。

新しい歴史……社会からはなれ、自ら孤独を選んだ者たちが、病人として、半ば強引に社会に再構成されていく。その彼らの側から、歴史を書く仕事が、われわれには残されている。

→ **歴史から消え去ろうとする者たちの歴史**を書くこと……。

### 6-3. 人間の死

#### 【狂気の歴史】

近代西欧の合理主義は、かつては知として並び立っていた狂気と学問とを裁断し、狂気を精神病にかえ、治療の対象にしてしまった。

#### 【言葉と物】

言葉（厳密には言表）は、エピステーメー（知の規準）にしたがって、『言説（ディスクール）』として再構成される。そうして歴史的に形成された知の網の目が権力となり、ひとびとの視線のあり方そのものを変化させてしまう。

#### 【監獄の誕生】

近代において、それはとりわけ『規律（ディシプリン）権力』という形であらわれた。狂気＝精神病の治療同様、犯罪もまた、精神的な矯正（＝生活上の労働習慣の体得：自ら正確に8時に起き、朝食を食べ、工場に行き……）の対象である。近代における監獄は、犯罪者を別世界に隔離するための場所ではなく、『自力で更生するために精神そのものの改造を行なう場所』であった。ジェレミー・ベンサムが考案した『一望監視方式』（パノプティコン）にもとづく監獄ができるのと同じプロセスで、軍隊や学校、病院や工場が、すなわち社会が形成される。言説は、多くの場合、つねに／すでに、不可視の権力として再構成されたものだ。

#### 【知への意志】

こうした権力装置は、ついには肉体にまで及ぶ（生政治、バイオポリティクス）。近代の権力とは、前近代の王権が生殺与奪の権（簡単にいえば、殺す権利）であるとするなら、生命を保存ための権力である（国家は、国民の生命を護るためなら、戦争さえ辞さない……）。ひとびとの生をはじめから終わりに至るまで管理することによって、生そのものが権力を維持するための道具として振舞い、決められた道筋を自ら演じる結果を招いてしまう（Cf. 福祉国家）。知そのものが、絶対的な真理よりも先に権力として振る舞い、真理のあり方を決めてしまう。たとえば、キリスト教会で行なわれた告白（懺悔）は、ひとびとの精神（内面性）を、ある知的な基準（この場合はキリスト教、とくに牧人-司祭型権力）に沿った形で作り変えてしまう。さらに、そうした権力は、性という快楽に満ちた欲望さえ、再構成した形でひとに与えることになるだろう。

#### ○ 彼が作り上げた、非常に魅力的な概念

歴史学的なもの：考古学／言説（ディスクール）／エピステーメー／言表（エノンセ）／主体…

社会学的なもの：狂気／ディシプリン／パノプティコン（一望監視方式）／統治／牧人-司祭型権力／生政治…

#### ○ フーコーの権力概念

権力はミクロなものとして、一個人の周囲に広がる人間関係そのものにまで及んでいる。こうした権力関係の網の目のなかで、ひとはどのように『自由』を実現することができるのか？

## ○ 人間の死

この書物の出生地はボルヘスのあるテキストのなかにある。それを読みすすみながら催した笑い、思考におなじみなあらゆる事柄を揺さぶらずにはおかぬ、あの笑いのなかだ。いま思考と言ったが、それは、われわれの時代と風土の刻印をおされたわれわれ自身の思考のことであって、その笑いは、秩序づけられたすべての表層と、諸存在の繁茂をわれわれのために手加減してくれるすべての見取図とをぐらつかせ、〈同一者〉と〈他者〉についての千年来の慣行をつきくずし、しばし困惑をもたらすものである。ところで、そのテキストは、「シナのある百科事典」を引用しており、そこにはこう書かれている。「動物は次のごとく分けられる。(a) 皇帝に属するもの、(b) 香の匂いを放つもの、(c) 飼いならされたもの、(d) 乳呑み豚、(e) 人魚、(f) お話に出てくるもの、(g) 放し飼いの犬、(h) この分類自体に含まれているもの、(i) 気違いのように騒ぐもの、(j) 算えきれぬもの、(k) 駱駝の毛のごとく細の毛筆で描かれたもの、(l) その他、(m) いましがた壺をこわしたもの、(n) とおくから蠅のように見えるもの。」この分類法に驚嘆しながら、ただちに思いおこされるのは、つまり、この寓話により、まったく異なった思考のエクゾチックな魅力としてわれわれに指しめされるのは、われわれの思考の限界、《こうしたこと》を思考するにあたっての、まぎれもない不可能性にほかならない。

（『言葉と物——人文科学の考古学』渡辺一民・佐々木明訳、P.13）

ともかく、ひとつのことがたしかなのである。それは、人間が人間の知に提起されたもっとも古い問題でも、もっとも恒常的な問題でもないということだ。…人間は、われわれの思考の考古学によってその日付けの新しさが容易に示されるような発明にすぎぬ。そしておそらくその終焉は近いのだ。

もしこうした配置が、あらわれた以上消えつつあるものだとすれば、われわれがせめてその可能性くらいは予感できるにしても、さしあたってなおその形態も約束も認識していない何らかの出来事によって、それが十八世紀の曲り角で古典主義的思考の地盤がそうなったようにくつがえされるとすれば——そのときこそ賭けてもいい、人間は波打ちぎわの砂の表情のように消滅するであろうと。

(P.409)

## 7. 人間の不在

### 7-1. 僕は人間を探している

#### ○ 犬のディオゲネス (B.C.414(?)~323)

キュニコス（犬儒）派の哲学者。アンティアネスの弟子（アンティアネスはソクラテスの弟子）。通貨を偽造してシノペを追放されたといわれる。アテネで彼は酒樽を住まいとし、頭陀袋と杖だけで生活した。自分で息をつめて死んだとも、犬にタコをやっていたら足を食われて死んだとも、タコを生で食ってコレラになって死んだとも伝えられる。

（ディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』が伝える犬のディオゲネスのエピソード）

- ※ プラトンの授業は暇つぶしであると言っていた。
- ※ 捕えられ奴隷として売られたとき、どんな仕事ができるかと尋ねられ「人々を支配することだ」と答えた。
- ※ 自分の買主であるクセニアデスに対して、自分は奴隷であるが自分の言うことに従ってもらわねばならないと言っていた。
- ※ あるとき彼が「おい人間どもよ」と叫んだので、人々が集まってくると、彼は杖を振り上げて彼らに迫りながら「ぼくが呼ん

だのは人間だ」と言った。

- ※ アレクサンドロス大王は、もし自分がアレクサンドロスではなかつたとしたら、ディオゲネスであることを望んだであろうと語った。
- ※ 「君はもう年寄りだ。今後は力を抜いてくつろぎたまえ」と言った人たちに対して、「長距離コースを走っているのに、ゴール間近で力を抜くべきだというのかね」と彼は言い返した。
- ※ ある人が彼のもとで哲学を学びたいと望んだ。そこで彼はその人に一匹の鱸（スズキ）を与えて、それをひきずって自分のあとからついてくるようにと命じた。
- ※ 小さな子が両手で水をすくって飲んでいるのを目にして「ぼくはこの子に負けた」といって、頭陀袋に入っていたコップを投げ捨てた。皿を壊してしまった小さな子がパンの凹みにレンズ豆のスープを容れているのを見て、彼はお椀も放り出した。
- ※ 彼は次のような推論も行なった。神はすべてのものを所有している。賢者は神々と親しい。よって賢者はすべてのものを所有している。
- ✂ 彼がクラネイオンで日向ぼっこをしていたとき、アレクサンドロス大王がやってきて、彼の前に立って「何なりと望みのものを申してみよ」と言った。すると彼は「どうかわたしを日陰におかないでくれ」と答えた。
- ※ プラトンが彼のことを犬だと言ったとき「そのとおりだ」と答えた。
- ※ 彼が公衆浴場から出て来たとき、人は多かったかねと訊いた者には「否」と答え、混んでいたかと訊いた者には「然り」と答えた。
- ※ プラトンが「人間とは二本足の、羽のない動物である」と定義して好評を得ていたとき、彼は雄鶏の羽をむしりとり、それをさげてプラトンの教室へ入って行き、「これが人間だ」と言った。それからこの定義には「平たい爪をした」という語句が付け加えられることになった。
- ✂ 彼は白屋にランプを灯して、「ぼくは人間を探しているのだ」と言った。
- ※ 彼はまた、アテナイ人たちから愛されてもいた。事実、ある若者が彼の犬糞を粉々に壊したとき、アテナイ人はその若者に鞭打ちを加えたが、彼には別の糞を提供してやった。
- ※ 彼は金に困ると、友人たちに貸してくれとは言わないで「返してくれ」と言った。
- ※ あるとき彼は人のみている広場で自慰に耽りながら「ああ、お腹もまたこんなぐあい、こすりさえすれば満足できるならいいのになあ」と言った。
- ※ ある人たちが宴席で犬にでもやるように彼に骨を投げ与えた。すると彼は帰り際に犬がするように彼らに小便をひっかけた。
- ※ 彼が人に物を無心する場合には——とはいっても、最初は食べるのに困ってそうしたわけだが——彼は次のような言い方をした。「もしすでに他の人にも与えておられるのなら、わたしにも下さい。でもまだ誰にも与えておられないなら、わたしからまず始めてください。」
- ※ プラトンがイデアについて語り、「机というもの」とか「盃というもの」とかというような言葉を用いていると、彼は、「プラトンよ、ぼくには机や盃は見えるけれど、机というものとか、盃というものとかは、どうも一向に見えないね」と言った。
- ※ 「君にはディオゲネスはどのような人だと思うか」と訊かれ、プラトンは「狂えるソクラテスだ」と答えた。
- ※ あるとき、広場でものを食べていたといつて非難されると、「おなか为空いたのも広場だったからね」と言い返した。
- ※ またある人たちは、次の話も彼についてのものだと言っている。すなわち、彼が野菜を洗っているのをプラトンは見て、彼のそばに歩み寄り、おだやかな口調で、「もし君がディオニュシオスに仕えていたなら、君はいまごろ野菜なんか洗うことはなかったろうにね」と言った。すると、彼も同じようにおだやかな調子で、「君の方も、もし野菜を洗っていたなら、ディオニュシオスに使えてはいなかったろうにね」と言い返した。
- ※ アレクサンドロス大王があるとき彼の前に立って「余は大王のアレクサンドロスだ」と名乗ったら、「そして俺は犬のディオゲ

ネスだ」と応じた。どんな振る舞いをするから犬と呼ばれているのかと訊かれたら、「ものを与えてくれる人たちには尾をふり、与えてくれない人たちには吠え立て、悪者どもには咬みつくからだ」と答えた。

- ✂ あなたはこの国の人かと訊ねられると「世界市民（コスモポリテース）だ」と答えた。
- ✂ ある人が子供を弟子入りさせようと連れてきてこの子はたいへんよい素質をもっているし性質もいたってすぐれていると言ったとき「ではどうしてぼくが必要なのかね」と答えた。
- ✂ 「わたしは哲学には向いていません」と言った人に対して「ではなぜ君は生きているのだね、立派に生きるつもりが君にないのだとすれば」と言った。
- ✂ アレクサンドロス大王が彼の前に立って「お前は余が恐ろしくないのか」と言ったとき、彼は「いったいお前は何か。善い者か、悪い者か」と訊ねた。そこで大王は「むろん善い者だ」と答えると「誰が善い者を恐れるか」と言った。
- ✂ 世の中でもっともすばらしいものは何かと訊かれたとき、「何でも言えること（パルレーシア—Parrhesia）だ」と答えた。
- ✂ 唯一の正しい国家は世界国家であると言っていた。
- ✂ この人の説得には一種驚嘆すべきものがあり、言論でもって、誰であろうとすべての人をやすやすと虜にすることができた。伝えられるところでは、アイギナの人オネシクリトスとかいう人は、二人の息子のうちの一方のアンドロステネスをアテナイに遊学させたのだが、この息子はディオゲネスの弟子になってその地にとどまってしまった。様子を探らせようともう一方の息子ピリスコスを送ったところ、彼もまた同じように引き止められてしまった。それで遂に父親自身が出かけたが、この父もまた同様に息子たちと一緒に哲学に励むことになってしまった。
- ✂ 息を止める修行をし、自分で息をつめて死んだということになっている。アレクサンドロスがバビュロンで死んだのと、ディオゲネスがコリントスで死んだのとは同じ日であったという。

## 7-2. 僕は神を探している

### ○ フリードリヒ・ニーチェ（1844-1900）——神の死と超人

#### 【悦ばしき科学】

狂気の人間。——諸君はあの狂気の人間のことを耳にしなかったか、——白昼に提燈をつけながら、市場を馳けてきて、ひっきりなしに「おれは神を探している！ おれは神を探している！」と叫んだ人間のことを。——市場には折しも、神を信じないひとびとが大勢群がっていたので、たちまち彼はひどい物笑いの種となった。「神さまが行方知れずになったというのか？」とある者は言った。「神さまが子供のように迷子になったのか？」と他の者は言った。「それとも神さまは隠れん坊をしたのか？ 神さまはおれたちが怖くなったのか？ 神さまは船で出かけたのか？ 移住ときめこんだのか？」——彼らはがやがやわめき立て嘲笑した。狂気の人間は彼らの中にとびこみ、孔のあくほどひとりびとりを睨みつけた。「神がどこへ行ったかって？」、と彼は叫んだ、「おれがお前たちに言ってやる！ おれたちが神を殺したのだ——お前たちとおれがだ！ おれたちはみな神の殺害者なのだ！ だが、どうしてそんなことをやったのか？ どうしておれたちは海を飲みほすことができたんだ？ 地平線をのこらず拭い去る海綿を誰がおれたちに与えたのか？ この地球を太陽から切り離すようなことを何かおれたちはやったのか？ 地球は今どっちへ動いているのだ？ おれたちはどっちへ動いているのだ？ あらゆる太陽から離れ去ってゆくのか？ おれたちは絶えず突き進んでいるのではないか？ それも後方へなのか、側方へなのか、前方へなのか、四方八方へなのか？ 上方と下方がまだあるのか？ おれたちは無限の虚無の中を彷徨するように、さ迷ってゆくのではないか？ 寂寞とした虚空がおれたちに息を吹きつけてくるのではないか？ いよいよ冷たくなっていくのではないか？ たえず夜が、ますます深い夜がやってくるのではないか？ 白昼に提燈をつけなければならぬのでないか？ 神を埋葬する墓掘人たちのざわめきがまだ何もきこえてこないか？ 神の腐る臭いがまだ何もしてこないか？ ——神だって腐るのだ！ 神は死んだ！ 神は死んだままだ！ それも、おれたちが神を殺したのだ！

殺害者中の殺害者であるおれたちは、どうやって自分を慰めたらいいのだ？ 世界がこれまでに所有していた最も神聖なもの最も強力なもの、それがおれたちの刃で血まみれになって死んだのだ、——おれたちが浴びたこの血を誰が拭いとってくれるのだ？ どんな水でおれたちは体を洗い浄めたらいいのだ？ どんな贖罪の式典を、どんな聖なる奏楽を、おれたちは案出しなければならなくなるだろうか？ こうした所業の偉大さは、おれたちの手にあまるものではないのか？ それをやれるだけの資格があるとされるには、おれたち自身が神々とならねばならないのではないのか？ これよりも偉大な所業はいまだかつてなかった——そしておれたちのあとに生まれてくるかぎりの者たちは、この所業のおかげで、これまであったどんな歴史よりも一段と高い歴史に踏み込むのだ！——ここで狂気の間人は口をつぐみ、あらためて聴衆をみやった。聴衆も押し黙り、訝しげに彼を眺めた。ついに彼は手にした堤燈を地面に投げつけたので、堤燈はばらばらに砕け、灯が消えた。「おれは早く来すぎた」、と彼は言った、「まだおれの来る時ではなかった。この怖るべき出来事はなおまだ中途にぐずついている——それはまだ人間どもの耳には達していないのだ。電光と雷鳴には時を要する、星の光も時を要する、所業としてそれがなされた後でさえ人に見られ聞かれるまでには時を要する。この所業は、人間どもにとって、極遠の星よりもさらに遥か遠いものだ——にもかかわらず彼らはこの所業をやってしまったのだ！」——なおひとびとの話では、その同じ日に狂気の間人はあちこちの教会に押し入り、そこで彼の「神の永遠鎮魂弥撒曲」(Requiem aeternam deo) を歌った、ということだ。教会から連れだされて難詰されると、彼はただこう口答えるだけだったそうだ——「これら教会は、神の墓穴にして墓碑でないとしたら、一体なんなのだ？」

（ニーチェ全集8 ちくま学芸文庫、pp.219-221）

- 神を殺害しただけで十分だと思っていた、人間たちへのニーチェの警鐘。神を殺害した人間に訪れようとしている、自分自身の消滅。人間の不在……。
- フーコー、犬のディオゲネス、ニーチェのあいだで交わされた、時空を超えた哲学的対話。人間の概念にまつわる複雑な共鳴。人間の死を宣告するフーコー、神の死を宣告し、かわって人間を超えたものを求めるニーチェ、そして人間を探す犬のディオゲネス。もっとも健全な思考がもっている、ある種の狂気。人間の知性は、どのようにしたら、新たな装いを得て再生するのだろうか。

## 8. パレーシア、《自由》とは

ギリシアの自由（エレウテリア）の象徴は、イセーゴリア（平等な発言の権利）から、パレーシア（言いたいことを言うこと）へと変わっていく。たんに発言するのではなく、おのれが言いたいことを言うことがいかにむずかしいか。本当に言いたいこと、とはなんだろうか？ それは、借り物ではない、おのれの言葉で、心の底から語る（表現すること）ではないだろうか。

- われわれの生が、それに先立つ権力によって統治・管理されることなく、生の実践＝歴史となっていくような、そういう時間を求める。生と歴史とが自然に結びついているような、そうした健康な世界を築くために、われわれは《本当に自分の言いたいことを言うべく、努力せねばならない》。
- 人文学者のわたしは人間を探しつづける。しかし君たちは、古い人間を超えて、未来に踏み出してほしい。新しい人文学を、打ち立ててほしい！